

1878年に針ノ木峠を越え、立山登山を試みたアーネスト・サトウの日記抄 補遺 ―明治11年7月28日～29日―

著者	佐藤 卓
雑誌名	富山市科学博物館研究報告
号	39
ページ	101-104
発行年	2015-06-20
URL	http://repo.tsm.toyama.toyama.jp/?action=repository_uri&item_id=1018

資 料

1878年に針ノ木峠を越え、立山登山を試みた アーネスト・サトウの日記抄 補遺 —明治11年7月28日～29日—

佐藤 卓

日本海植物研究所

939-3553 富山県富山市水橋的場195

Supplement, the private daily of Ernest Mason Satow, who tried to climb up to Mt. Tateyama through Harinoki-touge in July 28–29 1878

Takashi Sato

Nihonkai-shokubutu Research Institute

195 Matoba, Toyama-shi, Toyama, 935-3553 Japan

はじめに

アーネスト・サトウは1843年にロンドンで生まれ、文久2年(1862年)、イギリス公使館付き通訳生として来日し、幕末から明治にかけて、通算25年間、日本に駐在。明治維新や西南戦争などを目の当たりにした外交官である(横浜開港資料館, 2001)。サトウは35才の時、明治11年7月17日から8月13日まで立山と御岳を登る目的で、英国公使館のホーズと越中・飛騨の旅を行った。その時に書いた日記の内、富山県関係部分の抄訳を佐藤・朝倉(2014)として発表した。

しかし、7月28日の後半部分は資料読み取り不能であったため、抄訳できなかった。今回、7月28日と29日の資料を入手できたので、佐藤・朝倉(2014)の補遺として発表する。

日記を翻訳するに当たり、横浜開港資料館所蔵の複製本、SATOW PAPERS: DIARIES 1861-1926 P.R.O. 30/33(9)を用いた。また、庄田元男(1992年)が「日本旅行日記1」でサトウの日記を翻訳している。これらの先行研究を参考に、今回の日記の抄訳を試みた。

抄訳文の〔 〕はサトウが注釈したものを示し、サトウの日記中の()はそのまま示した。〈 〉は今回の抄訳で著者が注釈した部分である。注釈が長くなる場合には、番号を付し抄訳の後に注釈をつけた。訳文の改行は著者が適宜入れた。植物の学名等は米倉・梶田(2003-)によった。サトウの日記に基づいて、通ったと思われるルートを図1に示した。

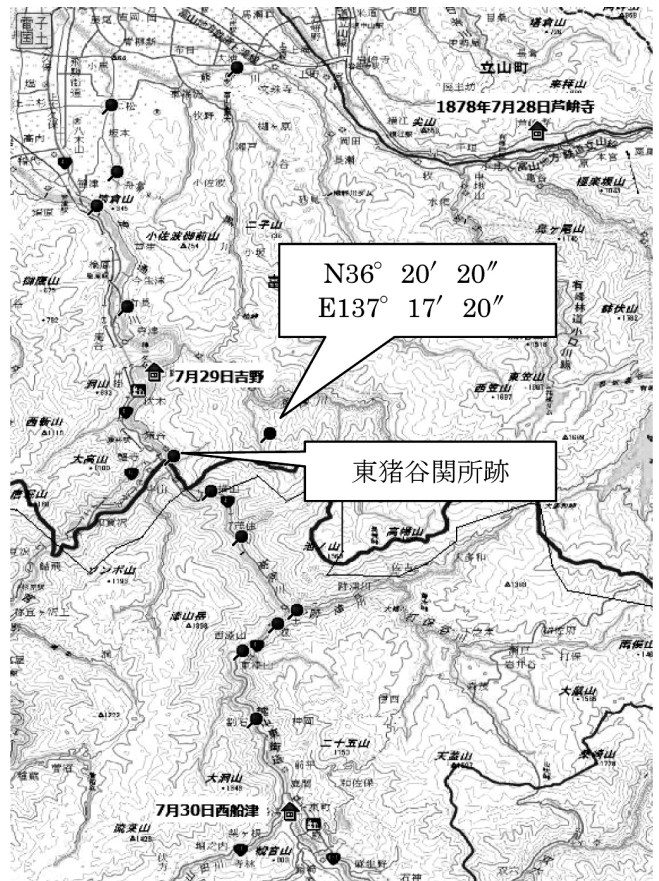


図1 アーネスト・サトウが歩いたルート

1878年(明治11年)7月28日

この道く^①飛騨街道東道>はトンネルが無く、狭くて切り立った下を流れる急流には巨大な岩が崩れ落ちている。そこに狭い橋が架かっている様子は、スイスのヴィアマラク^②スイスのライン川の支流ヒンターライン川にある険悪な溪谷の名前。Via Malaは“険悪な道”という意味>に似ている。川の両側の崖はせり出した茂みと低木に覆われている。そのため、稜線はいつも見られるわけではない。道は用水路と崖の間に作られ、曲がりくねった谷に忠実に沿っており、心地よく歩くことができるちょっとした山道である。

上述した支流を渡った後、耕された所より少し上の小道にでた。峡谷は少し広くなり、吉野へ下った。川岸の反対側は絵に描いたように美しい片掛の集落だ。そこには畳の無い粗末なスイスコテージ風の宿がある。我々はマス煮物の切り身の夕食を食べた。海拔700フィートたらずにもかかわらず、蚊はいなかった。

我々は箆の渡し^③広瀬(1970)が吉野の箆の渡しについて言及し、高原川の箆の渡しに使われた箆の構造図を示している>を見た。急流の狭まった所に強く固定されたロープがさし渡され、両端の岩の柱にしっかり固定されている。動く箆^④>は曲がった4本の枝の端でしっ

かり結ばれていた。一つの輪は低いところで結ばれていた。籠はロープに引っかかっているだけ。乗客は足をロープの上に繋がっている留め金の上に乗せる。きつく足で挟み込み、カエルのようにしゃがみ込み、反対側に無事にたどり着くまでロープに従って一寸ずつ籠を持ち上げ、ジャンプする。細いひもが籠の底に結びつけてある。それは横断した後の乗客のためのもので、反対側から乗る場合に用いられる。

鮎 (*salmo altivalis*) は、川で網を用いて捕られている。マスも同様に網や鋭い4本爪のヤスで捕獲される。それらは8ないし9ポンド。吉野には過去、稼働していた鮎山^⑤吉野鮎山>があり、最盛期には百軒からなる村をなしていたが、今はたった32軒しかない。Murayama Kichishiro^⑥村山吉四郎?>は我々の予定された宿の主人の名前である。彼はまだ54才だが、70才に見えた。芦峠からMizushi<水須>を経て薄波まで行く山越えの道はいくらか近道で、9里と言われている。しかし、それは我々が歩いた平坦路の11里より長く感じられた。

7月29日

7時に15分前、旅を始めた。1時間で猪谷。昔、ここに関所があった。偉大なる川に向かう。橋から絵のように見える激流となって流れる川の右左から樹木の葉がせり出している。両側の良く茂った森からくっきりと切り開かれた道は、巨人の散歩道のような。さらに高い山が天空を遮っている。



図2 マルタゴンリリー (スイスで撮影)

我々の道は狭い谷間を避けて右に向う。今までの所はコースアウトしていない。ぐるっと回って、我々は高原川の右岸の急な道を登った。その道は緑色の川面より300~400フィート上で、垂直の崖の下に沿っていた。しかし、左岸の道は平坦で容易な道で、水面から30フィートも無い所を曲がりくねっている。籠の渡しは川の合流部<高原川と宮川の合流部>からそんなに遠くない。2つの国の境界を示すN36° 28' 20", E137° 17' 20" と記された標柱^⑦図1に日本測地系による位置を示した>に至る数ヤード手前は、川を見下ろす美しい眺めであった。

峡谷は再び少し開け、横山に着いた。吉野から2時間。すばらしい林が川と丘陵の稜線を覆っている。ブナ、トチノキ、ナラ、クリが多い。吉野の近くではタバコの栽培が行われている。多くの峡谷のクワは実をつけていた。

過去に銅山があった茂住を通して長時間歩いた。集落を離れてすぐ、右側の道を1里登り、跡津川の分岐点である土村へ正午に着いた。ここで昼食をとった。日陰で華氏88度 (31.1°C)。多くの村でカイコが飼われている。野生と栽培種の桑があった。セイヨウミザクラ^⑧>の実がおいしい。有峰まで跡津川谷をさかのぼって4.5里だ。我々の宿主は、有峰の人々は他の日本人と違いがあることを否定した。しかし、あるとすればそれは親族内で結婚すること (同族結婚)、集落の家の数が形式的には増加させないことだと聞いた。跡津川には橋が架かっていた。

牧のそばを通して、高原川に架かる橋を渡り、暑い中歩き、漆山で休んだ。道の上ののしかかる巨大な岩が作る陰は心地よかった。ツツジとturksalilies^⑨マルタゴンリリー (図2) だが、これはコオニユリ (図3) と考えられる>が岩の上の至る所にあった。橋は甲州街道の猿橋や山間地にあるすべての橋と同じ原理で作られている。



図3 コオニユリ (南砺市下梨で撮影)

西船津への道く^⑩越中中街道>は午後の日差しの陰になっていた。道はしばしば垂直の険しい壁に沿っていた。葉の先から根を出し、新しい個体を作るシダくツルデンダ?>があった。割石集落の平にある茶屋は船津から10ないし12町。すぐ上方、空を背景に前平の銅精錬場を見ることができる。

広々とした盆地を流れる2つの川が分かれる所に、丘陵の端に沿って家がきれいに点在する。マスとハヤく^⑪アマゴ>が捕られる。大規模な土砂崩れく^⑫>が8年前に起きた。その時には雪融けのために山の半分が河床に押し込まれ、多くの水田が埋もれた。

たった海拔1300フィートなのに蚊はいない。温度計は午後9時に華氏83度(28.3℃)を示した。この町で作られる物は木製の椀や籐製の小物である。少し厳しい歩きだった2日間、靴下をはかずにわらじを使ったためか、私の右足の足首がひどく腫れた。宿はIzumiya Gonshichiroと呼ばれ、そこにはたくさんの客がいた。

注釈

<①>飛騨街道は、「近世における越中と飛騨のそれぞれの首邑であった富山と高山を結ぶ街道は、...、越中では飛騨街道・飛州往来または高山道と呼ばれ、飛騨側では越中街道と称した。溪谷部に入ってから加賀藩領の右(東)岸を通る飛騨街道東道と、富山藩領の左(西)岸を通る飛騨街道西道とがあり」と富山県歴史の道調査報告書飛騨街道(その1)(富山県教育委員会, 1979)では述べている。サトウが歩いた道は笹津から神通川の右岸なので、富山県内は飛騨街道東道を歩いていることになる。

<②>Via Mala はスイスのライン川の支流ヒンターライン川ある景勝地で、川幅が狭く、悪路が有名。Via Mala という名前もイタリア語でVia=道, Mala=悪いである。

<③>吉野にあった籠の渡し場は、細入村史通史編上(細入村史編纂委員会, 1987)によれば、「現在の神通川第一ダムの約100m下流の地(p282)に、籠の渡場が明治初年まであり、今も年配の人々はそこを「籠場」とよんでいる」と記している。サトウの日記は明治11年7月のことなので、籠の渡しが明治11年にはあったことになる。

<④>富山市猪谷にある猪谷関所館には、蟹寺と岐阜県谷を結ぶ籠の渡しで使われた籠の模型が展示されている。

<⑤>大沢野町史編纂委員会(1958)によれば、吉野銀山は松倉などと同様に天正初年に発見され、慶長年中は1年間に運上銀千枚程宛上納したことが記されている。その頃が最も栄えたという。

<⑥>昭和48年版住宅地図の吉野には、村山姓の住宅は記されていない。

<⑦>日記にN36° 28' 20", E137° 17' 20" と記された地点を図1に示した。飛越東街道の富山県と岐阜県の県境の位置は、現在の世界測地系でのN36° 27' 04", E137° 15' 22" である。

<⑧>wild cherry はセイヨウミザクラで、学名として米倉(-2003)は*Cerasus avium* (L.) Moench を用いている。その当時、斐太後風土記の巻十六(富田, 1915)の土村の記述には、産物として稗(4石)、橡(2石)、繭(4貫目)、楮(17.5貫目)、柿(7斗)などが紹介されているが、桜桃は記載されていない。

<⑨>turkscalilies はマルタゴンリリー(*Lilium martagon* L.) のことで、スイスアルプスなどの草原に普通に見られる高さ80cmに達するユリである(Landolt・Urbanska, 1989)。岸壁や崖などの乾燥しやすいところにはあまり生育しない。7月下旬に咲くオレンジ系のユリで、富山県から岐阜県に分布するものはコオニユリ(*Lilium leichtlinii* Hook.f. f. *pseudotigrinum* (Carrière) H.Hara et Kitam.) と考えられる。オニユリも富山県の海浜地に分布するが、山間地には分布しないので不適当と考えられる。

<⑩>牧を通り抜けた後、高原川の橋を渡っているの、越中中街道を歩いていると考えられる。垂直の険しい壁に沿った道という表現は割石近くの中街道の立地(菅田一衛, 1999)と一致する。

<⑪>神岡町史通史編Ⅱ(飛騨市教育委員会, 2008)p648によれば、ハエはアマゴのことある。舟津町では1年間にハエが1500尾とれたことが斐太後風土記の巻十六(富田, 1915)p160にある。アジメザッコ(アジメドジョウ)も2斗捕れたことが記されている。

<⑫>大規模な土砂崩れが8年前("8 springs back")に起きたと記しているが、神岡町史通史編Ⅰ(飛騨市教育委員会, 2009年)には明治3年頃の災害記録は記述されていない。その近くで起きた大規模な土砂災害は、安政5年2月に起きた飛越大地震によるもので、「山崩れで河流を塞ぎ越中街道交通途絶す、大洞山頂も崩れる(船津町村に面した方)」とある(飛騨市教育委員会, 2009年)。日記では、当時(1878年)の8年前と記しているが、安政5年は1858年であるから20年前のことになる。「8年前に」という訳が適切かどうか、再検討が必要である。

文献

飛騨市教育委員会, 2008. 神岡町史通史編Ⅱ; 648.
飛騨市教育委員会, 2009. 神岡町史通史編Ⅰ; 960-961.
広瀬誠, 1970. 籠渡の歴史と文献. 富山史壇, 46:1-13.
細入村史編纂委員会, 1987. 細入村史通史編(上), 281-282.

- Landolt, E. & Urbanska, K.M. 1989. Our Alpine Flora. p142. SAC Publications.
- 大沢野町史編纂委員会, 1958. 吉野鉾山の盛衰. 大沢野町史上巻, pp233-240.
- 佐藤卓, スイスアルプスの植物. p75. 私家版.
- 佐藤卓・朝倉朋子, 2014. 1878年に針ノ木峠を越え, 立山登山を試みたアーネスト・サトウの日記抄. 富山市科学博物館研究報告
- 庄田元男, 1992. 日本旅行日記1. pp. 64-133. 平凡社, 東京.
- 菅田一衛, 1999. 市川健夫・北林吉弘・菅田一衛編「定本-鰯街道-その歴史と文化」. p92-93. 郷土出版社. 松本.
- 富田礼彦, 1915-6. 斐太後風土記下 (巻13至20, 付録). p169.
- 富山県教育委員会, 1979. 富山県歴史の道調査報告書飛騨街道(その1). p15. 富山県.
- 横浜開港資料館, 2001. 図説アーネスト・サトウ. pp. 1-123. 有隣堂, 横浜.
- 米倉浩司・梶田忠, 2003-. 「BG Plants 和名-学名インデックス」(YList), http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist_main.html (2014年3月19日).